

『愛の悪魔』はピカソと並ぶ今世紀最大の画家フランシス・ベイコン(1909-1992)の生涯の中、作品のモデルで愛人だったジョージ・ダイアーとの関係に焦点を当てて描いている。ベイコンのマゾヒスト的な性癖の対極には、青年ダイアーに向けるサディスト的一面があり、その悪魔的な愛の関係を、盗みに入ってきたダイアーをベイコンがベッドに誘う出会いから、パリの大展示会のオープニングにホテルでダイアーが自殺するまでを、単なる事実の再現ではなく独自の解釈と現代的な感覚で描いている。

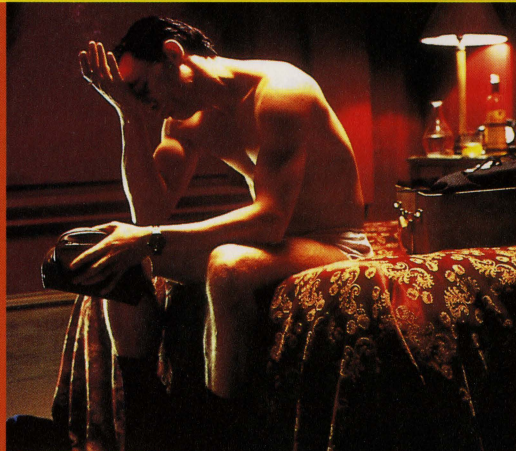
監督はシニード・オコナーなどのビデオ・クリップで名を馳せた映像派ジョン・メイブリイ。今回メイブリイはビデオで磨いたデジタル・テクニクはあえて使わず、60年代のベイコンが頻りに出入りした酒場やアトリエを忠実に再現し、彼特有の歪んだ絵画的なスタイルを巧みに映像に取り入れ、異色の画家の内なる悪魔を描いている。

サウンドトラックは坂本龍一が担当し、抑制の効いた音楽が絵画的映像をいっそう際立たせている。98年カンヌ国際映画祭「ある視点」に正式出品され、ヴァラエティ誌で「芸術家を描いた数々の映画の中で一つの新しい基準となることは間違いない」と絶賛された。ベイコンを演じるのは英国演劇界の重鎮サー・デレク・ジャコビ。彼はその卓越した演技力でベイコンになり切り、ダイアーを演じる新鋭ダニエル・クレイグと共にエジンバラ国際映画祭で最優秀演技賞を受賞。コロニー・ルームの辛辣な女主人をティルダ・スウィントンが演じ、また特別出演として、60年代にキース・リチャーズの恋人だったアニタ・バレンバーク、若手アーティストのゲラリー・ヒューム、デザイナーのリフト・オズベックなどが顔を出している。

なお本作品は1998年エジンバラ国際映画祭においてマイケル・パウエル賞(グランプリ)を受賞している。

FRANCIS BACON フランシス・ベイコン(1909-1992)

1909年10月28日ダブリン生まれ。父親は競走馬の調教師で、自分は1626年に死んだ哲学者フランシス・ベーコンの末裔だと公言していた。16歳で家を出て、18歳の頃、ピカソの個展を見て画家になる決心をする。25歳、初の個展を行なうが不成功に終わる。27歳、国際シュルレアリスト展に出品するが落選。36歳、《ある磔刑の下の人物のための習作》を制作し世間に大きな衝撃を与え、以後画家として認められ世界各地で展覧会を行なう。53歳、テイト・ギャラリーで自作の大回顧展。前夜愛人のピーター・レイシーがタンジールで死去。64年55歳、後に愛人となるジョージ・ダイアーと出会う。71年62歳、パリのグラン・パレで大回顧展。ダイアー、パリのホテルで自殺。『愛の悪魔』はダイアーとの出会いから死別迄の7年間を描いている。83年74歳、東京、京都、名古屋で展覧会が開催される。92年83歳、4月28日、旅行中にマドリッドで心臓発作により死去。



3月20日(土)よりロードショー

ホワイティーうめだ・泉の広場6番出口北へすぐ

シネ・ヌーヴォ梅田

TEL.06-6365-0094

11:30/13:20/15:10/17:00/18:50
4月9日まで

特別鑑賞券 ¥1500

(劇場窓口にてお買い上げの方にテイトギャラリー特製フランシス・ベイコンポストカード、プレゼント)

当日券料金 一般 ¥1800 学生 ¥1500 中・小・シニア ¥1000

マチネ料金 ¥1400(平日1・2回目のみ)

配給: アップリンク www.uplink.co.jp 宣伝協力: 楽舎

心斎橋ソニータワーB1

心斎橋 シネマ・ドウ

TEL.06-6251-3789

11:20/13:15/15:10/17:05/19:00
4月16日まで

愛の悪魔

LOVE IS THE DEVIL

フランシス・ベイコンの歪んだ肖像

STUDY FOR A PORTRAIT OF FRANCIS BACON

1998年 カンヌ国際映画祭「ある視点」正式出品作品

1998年エジンバラ国際映画祭マイケル・パウエル賞(グランプリ)受賞

最優秀演技賞受賞[デレク・ジャコビ、ダニエル・クレイグ]

ジョン・メイブリイ監督作品

出演: デレク・ジャコビ ダニエル・クレイグ ティルダ・スウィントン

監督・脚本: ジョン・メイブリイ 製作: キアラ・メナージュ 撮影: ジョン・マティエソン

美術: アラン・マクドナルド 衣装: アニー・シモンズ 音楽: 坂本龍一

共同製作: アップリンク BBC BFI Arts Council of England Premier Heure 1998/イギリス/90分/1:1.85 配給: アップリンク



映画自体がアートとなった作品

平林享子(「VIOLA」2月号)

芸術と狂気、男性同士の恋愛を描いたこの映画を観て、私は驚喜した。ペイコンを演じたデレク・ジャコビ(サーの称号を持つ英国演劇界の重鎮)が顔から雰囲気まであまりにもペイコンそっくりなうえに、伝説と化したペイコンのアトリエを見事に再現していたから。でも本当にスゴいのは、美しい色彩から奇妙に歪んだフォルムまで、ペイコンのあの絵を映像の中で絶妙に再現したこと! 人間の動きを瞬間冷凍したのがペイコンの絵なら、それを解凍したのがこの映画。笑ってしまうくらい衝撃的、かつペイコン作品への愛が溢れていて感動的なのだ。「映画の中でペイコンの本物の絵を使う許可が、ペイコン財団から下りなかった。でもそのお陰で、ペイコンがキャンバスに向かってやったことを、僕はフィルムの中でやろうという決心がついた。単なるペイコンの伝記映画ではなく、ペイコンのヴィジュアル言語を映画として表現できたと思う」

アーティストとその恋人の “愛の力学”を描く

河原晶子(「ハイファッション」2月号)

人間の肉体を裏返しにでもするかのように、皮膚をはがされてむき出しにされた内臓。溶け出し、血まみれになった肉塊。一度目にしてしまったら悪夢のように取り憑かれてしまいそうなフランシス・ペイコンの絵画が、まるで生命をよみがえらせたように映像となって動き出す。映画「愛の悪魔」は画家フランシス・ペイコンと彼の重要なモデルであり恋人でもあったジョージ・ダイアーとの壮絶な愛の闘いを描いた、しかしまぎれもなく美しい愛の映画である。

「ぼくは二人の力関係に心打たれた。ペイコンはダイアーからエネルギーのすべてを奪い、ダイアーは追い詰められてゆく。同性愛であろうと異性愛であろうと、恋愛には必ず起こることだ。ダイアーは彼の夢までペイコンの侵略を受ける。彼の自殺さえもがペイコンの絵になってしまうんだ。」メイブリイはそんなペイコン像にオスカー・ワイルドの存在を重ねあわせる。二人はどちらもアイルランド生まれの典型的な上流階級の紳士であり、ダンディで気取り屋でホモセクシュアルだった。

イギリスの映像派監督による新しい感覚

高木 完(「asayan」3月号)

『愛の悪魔』っていう映画は久々にデレク・ジャーマンとかケン・ラッセル直系のイギリスならではの感覚の新しい作品って感じで面白かった。フランシス・ペイコンという画家に関してそれほど詳しくはないんだけど、だいぶ前に彼の作品を本で見た時、調子良い頃のPILのジョン・ライドンの元ネタってこれかあ! (例:『デス・ディスコ』のジャケの絵とか、『メタル・ボックス』の紙ジャケバージョンの絵)って思ったし、あの超こわかった『サスペリア2(本当は2ではないんだけど)』に出てくる絵がそういやペイコンぽかったかも、なんて思いました。で、この映画、画家を描いた映画なんだけど『バスティア』みたいな失敗作に終わってなくて、ちゃんとそのペイコンのタッチを映像にしているところがいい。

タイトル・ロールの音楽を聴くためだけにでも、 映画館に足を運ぶ価値は十分にある

浅田 彰

何といっても、この映画でもっとも素晴らしいのは、坂本龍一による音楽である。ダイアーの無意識に取り憑いて反復される悪夢。それに対応して、映画のほとんどをノイズが覆う。時にはうめき声のような、時には無機質なノイズ。そして、そのノイズを貫いて響いてくる、痛いほど冷たい氷のようなピアノの音。電子時代随一のマニエリストの手になるだけあって、そのなかにはひとつとして単純な音などない。水滴の落ちる音さえ、ほとんど知覚不能なメロディを奏でたりするのだ。そうした音が、一分の隙もなく映像と呼吸しながら、いわば映画全体に取り憑き、陰影に満ちたサイキック・サウンドスケープを形成する。このサウンドトラックは、もはや映画のたんなる伴奏などというものではない、映画の主要な一要素なのだ。映画音楽の歴史のなかでも、これはひとつのブレイク・スルーとして長く記憶にとどめられるだろう。最後のシーン、ペイコンがホテルのバス・ルームで死んだダイアーの幻影の背骨のところをそっと撫でてやる場面では、不思議なノスタルジーを感じさせるエレクトリック・ピアノの音が美しいメロディを奏でる、こはいささか甘美に過ぎるのではないかと思ったのだが、作曲家の話では監督からのたつての要請だったらしい。その後、タイトル・ロールの背後で、当時の甘ったるいポップ・ソングが流れ、そしてまた坂本龍一の音楽に代わる。これまでに使われたありとあらゆる音の要素を巧妙に織りこみながら恐るべき速度で疾走するこの音楽は、実に素晴らしい。極言すれば、このタイトル・ロールの音楽を聴くためだけにでも、映画館に足を運ぶ価値は十分にある。

デレク・ジャコビ

DEREK JACOBI

——デレク・ジャコビさんにとって一言というのは難しいと思いますがペイコンという人間はどういう人間だったと思われますか。ジャコビ:僕はとは全然違うよ!僕とは正反対の人間だと思う。僕はおとなしい性格だけど、彼は何事にも立ち向かっていく性格だ。僕はココアを飲んで8時間たったりと寝るけど、彼は一晩中飲んだり、危なっかしいことをして楽しんだりするタイプだ。ある意味で彼は、もし僕にもう少し勇気があって全く違う性格になることが出来たら、なってみたいと思う人物かもしれない。でも、僕は役者だ。僕が授かったのは活発な想像力だ。だから僕は、彼の立場だったらどんな感じだろうと想像しながら役を作り上げていった。また、彼のサド・マゾ的なセクシュアルな面も僕には理解し難いものだ。でも、ペイコンにとって痛みは美しいもので、彼の想像力をかきたてる大事なものであった。僕にとって痛みは、避けたいもの以外何ものでもない。けれど、ペイコンは精神的に人をいたぶるのを好んだ。実際、僕は痛みを感じ取ることも嫌いだ。でも、ペイコンがああ素晴らしい絵を描いたのと同じように、僕も心に残るペイコン像を作り上げるのに全力を注いだので、観客にそれが伝われればいいと思う。

ダニエル・クレイグ

DANIEL CRAIG

——ダニエル・クレイグさんはこの恋人役を演じるにあたって、事実をかなり調べたのですか。それとも、監督と話し合って感覚的なものとして捉えて、役を作り上げていったのですか。クレイグ:どちらかというの後者かな。ジョージを演じる上で最も大きなハンディとなったのは、彼についての情報がほとんどなかったということだ。だから、ジョンは始めから故意に僕を他のスタッフから引き離れた。デレクを除いてね。彼とは早い時期から一緒に行動して、なるべく早く二人の関係を作らなければならなかったからね。でも、他のスタッフと出会ったのは、撮影当日さ。ジョンは敢えて僕を孤立させたんだ。彼のこの作戦は、何処にも属さないジョージを演じる上で大きく役立ったと思う。また、自分自身にも少なからずジョージに似た部分があると思うので、それも利用した。若い役者は、やりたいことがなかなか実現できない状況に置かれることがよくある。そして、認められようと虚勢を張る。でも、精神的に弱いと自分を責めて破壊しかなない。ジョージの場合がそうだった。ペイコンを取り巻く世界に魅了され、引き込まれ、遂には自滅してしまう。

JOHN MAYBURY

ジョン・メイブリイ(監督/脚本)

1958年生まれ。70年代ロンドンのパンクシーンの中でアンダーグラウンド映画を製作。その後デレク・ジャーマンに見い出され、ジャーマンのオムニバス短編『ドリーム・マシン』の1作品を担当。『ジュビリー』でセットとコスチュームを、『ラスト・オブ・イングランド』では編集を、『戦争レクイエム』では戦争シーンのデザイン・編集を担当した。またメイブリイはボーイ・ジョージなどの多くのミュージック・ビデオを監督しシニード・オコナーの『ナシング・コンベアーズ・トゥー・ユー』ではMTVの最優秀ビデオ賞を含む3部門で賞を獲得、グラミー賞にもノミネートされた。92年、ティルダ・スウィントン主演で『Man To Man』(エジンバラ国際映画祭批評家賞受賞)を監督。93年には、『リメンバランス』(ベルリン国際映画祭テディ・ベア審査員特別賞、ヴァイパー国際映画祭最優秀実験映画賞)を監督。映像製作の他ペインティングも行いロンドンで個展を行っている。

「決まりきった伝記映画を作ることには興味がなかった。フランシス・ペイコンについて知りたければ、なにより彼の絵が全てを物語っている。僕がアート・スクールに通っていた頃、ペイコンの絵の中で最も気に入っていた絵はジョージ・ダイアーを描いたものだった。二人の関係にはダイナミックなものがあるので、調べていくうちに非常に興味を持った。ただ、本当に二人の間で何が起こったかは誰にも分からない。そこで、僕は彼らの物語を事実に基づいたドラマティックなフィクションに仕上げようと思った」

STAFF

監督/脚本:ジョン・メイブリイ 製作:キアラ・メナージュ
総合製作:フランシス・アン・ソロモン(BBC) ベン・ギブソン(BFI) パトリス・ハダド(PREMIERE HEURE) 浅井 隆(UPLINK)
監修:ダニエル・ファーソン 製作進行:イヴォンヌ・イシメン・イバセボー 撮影監督:ジョン・マティエソン
編集:ダニエル・ゴダード 美術:アラン・マクドナルド 衣装:アニー・シモンズ 音楽:坂本龍一

CAST

デレク・ジャコビ(フランシス・ペイコン) ダニエル・クレイグ(ジョージ・ダイアー) ティルダ・スウィントン(ミユリエル・ベルチャー)
アン・ラムトン(イザベル・ローズソーン) エイドリアン・スカーボロー(ダニエル・ファーソン) カール・ジョンソン(ジョン・ディーキン)
アナベル・ブルックス(ヘンリエッタ・モラエス) リチャード・ニューボルド(プロンド・ビリー)



フィリップ・ソレルス
フランシス・ペイコンのパッション

五十嵐賢一【訳】 A4変形/上製箱入/178p./オールカラー●本体10000円+税
ペイコン絵画の真価をヌーヴォー・ロマンの作家ソレルスが語る。
▶ペイコン作品の多くを占める三連画を大型折込図版として多数収録

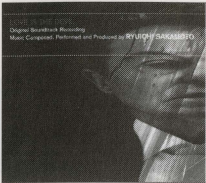
【関連書】**フランシス・ペイコン 対談 M・アルシャンボー** ●本体2600円+税

三元社 〒113-0033 東京都文京区本郷1-28-36 鳳鳴ビル1階 tel 03-3814-1867/fax 03-3814-0979



骰子/DICE 27号
cutting edge culture magazine
特集: DICE TALK —映画篇
是枝裕和「ワンドフル・ライフ」他
小特集: R.I.P. ジョー・コールマンの肖像
ジョン・メイブリイ・アートワーク

発行: 河出書房新社 発売: アップリンク 定価1000円+税 3月5日発売



LOVE IS THE DEVIL
オリジナル・サウンド・トラック 音楽: 坂本龍一
音楽も他のクリエイティヴ・スタッフ同様、自由に発想してもらい
コラボレーションを行なうという製作スタイルのため、坂本龍一の
ソロアルバムともいえる作品に仕上がっている。彼にとっては久しぶりのサントラで抑制の効いた音楽がメイブリイ監督の絵画的映
像スタイルを一層際立たせている。全28曲、44分37秒。

ASPHODEL records 輸入盤販売: アップリンク 定価1980円+税 発売中



LOVE IS THE DEVIL
film painting book
精緻に構成された『愛の悪魔』の映画の1フレーム、1フレーム
に画家でもあるジョン・メイブリイがペイントを施し、重層的な
イメージで綴るフィルム・ペインティング・ブック。

発行: アップリンク 1999年3月発売予定